

巻末演習問題の解説

問 1 ある地域や国などにおいて、歴史的に作り出され暗黙のうちに共有されている、自他の関係性についての通念を表す用語として、最も適切なものを1つ選べ。（第7回 問14）

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| ① 自己物語 | ② 集団規範 | ③ 暗黙の人格観 |
| ④ 文化的自己観 | ⑤ 内集団バイアス | |

この問題では、歴史的に形成されてきた文化によって、自己と他者の関係性が異なることを表す用語が問われている。自己物語や暗黙の人格観は、文化的な影響を想定した概念ではない。また、集団規範や内集団バイアスは、集団内のルールや内集団への認識に関連する概念であり、自己観とは異なる。文化的自己観は、異なる文化圏の人々がそれぞれの国の文化に沿って自己を解釈していることを明らかにした者であり、この問題で問われている概念と一致するものである。したがって、正解は、④の文化的自己観（詳細は本書の p56 を参照）となる。

問 2 説得的コミュニケーションにおいて、中心ルートと周辺ルートを仮定する理論やモデルとして、最も適切なものを1つ選べ。（第7回 問89）

- | | | |
|-------------|---------------|-----------|
| ① 接種理論 | ② 防護動機理論 | ③ 二重処理モデル |
| ④ 精緻化見込みモデル | ⑤ 心理的リアクタンス理論 | |

この問題では、説得における情報処理を中心的ルート（高い動機づけ・能力→内容を精査して決定）と周辺のルート（動機づけ・能力が不足→周辺の情報で決定）の視点から捉えるモデルが問われている。③の二重処理モデルは対人認知のモデルであり、説得とは関係がない。①の接種理論、②の防護動機理論、⑤の心理的リアクタンス理論は、説得に関する理論ではあるが、中心的ルートと周辺のルートを想定する者ではない。④の精緻化見込みモデルは、説得における情報処理を中心的ルートと周辺のルートで捉えるモデルであるため、正解は、④の精緻化見込みモデル（詳細は本書の p83 を参照）となる。

問 3 特定の集団や人々に対して、他者や他集団から付与された、拭い難いほどの否定的な価値付けを表す概念として、最も適切なものを1つ選べ。（第7回問96）

- ① ハロー効果 ② ステレオタイプ ③ 内集団バイアス
- ④ 社会的スティグマ ⑤ ヒューリスティックス

この問題では、特定の人や集団に「拭いがたい否定的価値づけ」がなされる現象を表す用語が問われている。①のハロー効果は、好印象になる評価の歪みのことで、②のステレオタイプは、過度の一般化を表すものではあるが、否定的な価値付けに限定されるものではない。③の内集団バイアスは身内の優遇の傾向であり、ヒューリスティックは効率的な推論を用いた意思決定を表す用語であり、社会的に形成される否定的な価値付けとは関係がない。④の社会的スティグマは、特定の属性や状態を持つ個人や集団に対して、否定的な価値付けがなされる現象を意味しており、正解は④の社会的スティグマとなる。

問 4 M. Bowen や I. Boszormenyi-Nagy が主導する家族療法の中心的な着眼点として、最も適切なものを1つ選べ。（第7回問124）

- ① 家族の構造
- ② 家族成員間のコミュニケーション
- ③ 無意識化に抑圧された幼少期の親子間の葛藤
- ④ 多世代にわたって引き継がれてきた家族内の価値観や習慣

この問題では、ボーエンとナージの家族療法の中心的な着眼点が問われている。①の家族構造は構造を重視したミニューチン、②のコミュニケーションの視点はコミュニケーションを重視したベイトソンら、③の無意識的な親子間の葛藤は精神力動的な視点を重視したアッカーマンの中心的な概念である。ボーエンとナージは、家族を多世代的な連続性の中で理解する「多世代家族療法」であり、正解は、④の多世代にわたって引き継がれてきた家族内の価値観や習慣となる（詳細は本書の p154）。

問 5 E. L. Deci と R. M. Ryan が提唱した自己決定理論における、叱られたり罰を受けたりすることを避けるために、何らかの行為を行う際の動機づけの調整スタイルとして、最も適切なものを 1 つ選べ。 (第 7 回 問 125)

- ① 外的調整 ② 統合的調整 ③ 同一化的調整 ④ 取り入れ的調整

「罰や叱責を避けるために行為する」調整のことを外的調整と呼ぶため、正解は①の外的調整となる。自己決定理論では、動機づけが、外的調整（罰や叱責を避けるために行為する）→④の取り入れ的調整（罪悪感の回避や自己承認のために行為する）→③の同一化的調整（価値があると認めて自分の目的として行為する）→②の統合的調整（特定の価値観を自己の他の側面と統合して、自分らしさのために行為する）という段階を経て、自律性が高まっていくことが指摘されている。①の外的調整は、最も他律的な段階を示している。

問 6 関係を通して形成してきた資源や、関係維持のために費やしてきたコストを用いて、関係に対するコミットメントを説明するモデルとして、最も適切なものを 1 つ選べ。 (第 8 回 問 12)

- ① 投資モデル ② 感情混入モデル ③ 2 重過程モデル
④ 精緻化見込みモデル ⑤ リターン・ポテンシャルモデル

人間が相互作用の中で報酬とコストを評価し、期待や代替可能性といった基準と照らし合わせながら関係性を形成・維持・変化させると捉える枠組みを社会的交換理論と呼ぶ。この中で、関係性の形成・維持のためにかけたコストを重視する考え方を①投資モデルと呼ぶ。したがって、正解は①の投資モデルとなる（詳細は本書の p102）。②の感情混入モデル、③の二重過程モデル、④の精緻化見込みモデルは、認知的処理や情報処理に関する理論であり、⑤のリターン・ポテンシャルモデルは、集団規範の強さに関する理論であるため、いずれも関係に対するコミットメントを説明するモデルとは異なる。

問 7 職場と家庭のような異なる状況で担う役割間の影響を表す用語として、適切なものを1つ選べ。(第8回 問13)

- ① スピルオーバー ② キャリーオーバー ③ オーバーアチーバー
④ カウンターバランス ⑤ ワーク・エンゲイジメント

仕事と家庭のように異なる役割の領域で、双方向的に影響が波及することをスピルオーバーと呼ぶため、正解は①のスピルオーバーとなる。②のキャリーオーバーは主に実験において先行する刺激によって生じた効果が、次の刺激への反応に影響することで、④のカウンターバランスは、実験において生じる順序効果を打ち消す手続きを意味する。また、③のオーバーアチーバーは学業等で期待以上に成果を出す人の呼称で、⑤のワーク・エンゲイジメントは仕事への肯定的な状態であり、いずれも異なる役割の領域での双方向的な影響の波及を説明した理論とは異なる。

問 8 公的自己意識の注意対象に該当するものを2つ選べ。(第8回 問56)

- ① 外見 ② 感情 ③ 記憶 ④ 言動 ⑤ 思考

公的自己意識とは、「他者から観察可能な自己」に向けられた注意の傾向です。②の感情、③の記憶、⑤の思考は他者から観察できない側面であるため、これらは該当しない。一方で、①の外見と④の言動は他者から観察が可能である。したがって、正解は①の外見と④の言動となる。

問 9 他者を観察するのと同じように自分の行動を観察することによって、自分の態度を知るという過程を考える理論として、最も適切なものを1つ選べ。(第8回 問91)

- ① 自己拡張理論 ② 自己決定理論 ③ 自己知覚理論
④ 自己注意理論 ⑤ 自己カテゴリー化理論

他者を観察するように、自分の行動を観察し、そこから「自分はこの対象を好んでいるのだ」などと、自己の態度を推論することを理論として示したのが③の自己知覚理論である。したがって、正解は③の自己知覚理論となる(詳細は本書のp16)。①の自己拡張理論は、自己の知識やスキルなどを拡張することができる

ような他者との親密な関係を求めるという理論、②の自己決定理論は、自律性などの基本的欲求に関する動機づけの理論、④の自己注意理論は、客体的自覚や自己制御に関連する理論、⑤の自己カテゴリー化理論は、所属集団に応じて自己の位置づけを変える理論であり、いずれも自分の態度を知る家庭の理論とは異なる。

問 10 13 歳の女子 A，中学 1 年生。父親 B と母親 C との三人暮らしである。中学に入学後しばらくして，理由ははっきりとしないものの不登校になり，その状態が継続している。B は仕事が多忙という理由で，家族に関することにはあまり関心を示さず，そのことで C と口論になることが多かった。しかし，A の不登校をきっかけに，B は C との間で，A の状態に関する情報を共有するための会話が増えた。

家族システム論の観点から，この家族関係を説明する心理学用語として，最も適切なものを 1 つ選べ。（第 8 回 問 136）

- | | | |
|----------|-----------|----------|
| ① 迂回連合 | ② 自己分化 | ③ ジェノグラム |
| ④ てんめん状態 | ⑤ ダブルバインド | |

この問題では、夫婦間に葛藤がある中で、子どもの不登校をきっかけとして、両親が子どもの問題に結束して向き合う姿勢が強まった事例が紹介されている。これは、夫婦間の問題を子どもを介して回避する①迂回連合の典型であり、正解は①の迂回連合となる。②の自己分化は他者の情動に巻き込まれずに自身の立場を保つ力、③ジェノグラムは家族関係を図式で表現する家系図であり、いずれも多世代派家族療法で重要な概念ではある。④のてんめん状態は、家族が過度の密着状態で、家族間があいまいな境界となっていることを意味し、構造的な側面から家族を捉える際に重要な概念となる。⑤のダブルバインドは、矛盾する二つのメッセージによるコミュニケーション的な拘束を同時に受けることで、メッセージの受け取り手が混乱する現象を意味する。②、③、④、⑤のいずれも、本事例とは関連がない。